様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 月 6 月 1 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
研究期間： 2007～2009
課題番号： １９５２０１８５
研究課題名（和文）『レディーズ･ホーム･ジャーナル』を中心とするアメリカ女性雑誌における言説研究

研究課題名（英文） A Study of Narratives in the *Ladies' Home Journal* and Some Other Popular Women's Magazines in the United States

研究代表者 秋田 淳子（AKITA JUNKO）
岩手大学・人文社会科学部・講師
研究者番号：１０２５１６８８

研究成果の概要（和文）： 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのアメリカにおいて、中産階級以上の白人女性をおもな対象に多くの読者を獲得することに成功し、女性文化構築に大きな役割を果たした『レディーズ･ホーム･ジャーナル』の多層な言説を考察した。特に 30 年間にわたって甚大な影響力を及ぼしたエドワード･ボックが編集長を務めた時代の言説に焦点をあて、編集長や編集部の意向が、小説作品をはじめとする様々な言説に反映されていることを確認した。

研究成果の概要（英文）：I have attempted to analyze the contents of some works printed from 1884 to 1949 in the *Ladies' Home Journal,* primarily under its second editor, Edward Bok (1863-1930). All of the contents of the magazine, including any literary works, were inevitable influenced by the philosophy and values of this prominent editor, whose goal was to use the *Journal*, as way of improving American society according to his lights. Bok edited the stories which his magazine carried in such a way to reflect his own set of ideals about what American society should be like—as well as to increase the magazine's circulation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	390,000

研究分野： 人文学
科研費の分科・細目：文学　英米・英語圏文学
キーワード： アメリカ文学、女性研究、雑誌研究、アメリカ文化

１．研究開始当初の背景

アメリカ文学研究の領域で小説を考察対象とする場合、著書の形態をとった作品を扱うのが通例である。しかし、それらの著書は、出版事情が成熟していなかった 19 世紀初頭のアメリカにおいて、雑誌への掲載という初

出形態をもつものが多い。雑誌への掲載はとくに無名の新人作家に執筆の機会を与えたり、職業作家として自立する機会を与える場となった。1980 年以降に、忘れられてしまっていた作家を出版当時の文脈の中で再評価する動きが高まる。この動向により、1850 年代に発表された、現在では無名の女性作家作品が復刻されるようになった。しかし、再評価がすすんだ 19 世紀の女性作家作品ばかりでなく、新人時代の男性作家、および、作家として名声を確立した作家ですら、1830 年代以降には受容が熟した雑誌という媒体を利用してアメリカ社会で読者を獲得することに成功し、作品を発表している。本研究は、著書の形態で研究されることが一般的なアメリカ文学研究を、作品の初出形態である「雑誌」という場に着目して再評価することを目的としてきた。雑誌掲載という初出の場を研究対象におくことで、著書という形態を対象とする文学作品の読み直し、そして、再評価がなされていない作家や作品の掘り起こしという 2 点において、従来の研究ではみえてこなかったアメリカ文学作品評価を行うことが可能となると判断した。

２．研究の目的

本研究で最終的に目指そうとすることは、個別のアメリカ文学作品理解を越えて、「アメリカ」という国家や社会自体、また、それを生み出した国民性を理解しようとすることにある。従来、見落とされがちであった雑誌の言説におけるイデオロギーを分析し、アメリカ社会や文化の新しい解釈をもたらすためには、一次資料として作者の伝記や手紙を利用するか、他の研究分野に関する著作物という二次資料を用いる方法が一般的である。本研究においては、研究関心を最も有効に活用する場として、小説の初出の場であることが多い「雑誌」という場に着目した。この媒体は様々な言説が同時に収録される媒体である。編集者のコラム、エッセイなどの散文ばかりか、広告や表紙をはじめとする挿絵を含めた異なる言説が構成する網の目の中で作品を解釈することにより、小説作品を独立した有機体とみなす作品解釈では明らかにされない、新たな様相を考察する。

女性大衆雑誌は、南北戦争後に大量消費社会が到来し、資本主義社会が確立する過程に伴い、広告収入を伸ばす。19 世紀半ばにはすでに熾烈な購買競争を展開していた。多くの女性雑誌は、19 世紀末の女性の社会関与が深まる時勢や、20 世紀の戦時下において政治的な立場をある程度明確にすることが求められた時もある。しかし、基本的には連載小説や詩などの文芸作品のほか、ファッション、ガーデニング、ダイエットなどの健康の話題、編集者のコラム、また、育児、料理、洗濯などの家事全般にたいするアドヴァイスなどの内容に関しては 19 世紀末の Consumer Magazines である女性雑誌の扱う内容に目立った違いはみられない。各誌が購買競争に生き残るために、他誌との差異化をはかる手段として利用したのは、散文の作品であった。この点は指摘されてはいるものの、戦略となった作品の詳細な内容分析はなされていない。また、各誌をとおして、連載小説を系統立てて、どのような戦略として利用されていたかという点に関する分析を扱う研究書はない。売り上げを延ばすために掲載された文学作品は編集者たちの準備した方向性や意図から独立して存在するものではない。初出形態を分析して再評価する作品研究は、新しい解釈をもたらす可能性をもつ。女性雑誌が、時代や読者、編集者の要求と切り離されたものではないこと、掲載された号の他の記事、また広告会社や流行商品との関連性があることなどを視点にいれた作品解釈はほとんどなされてきていないため、アメリカ文学研究やアメリカ研究に新たな一展望を拓くであろうと考える。

３．研究の方法

一次資料研究の意義：本研究では、週刊 *Tribune and Farmer* を前身とし、1883 年 12 月に Cyrus H. K. Curtis 者から刊行された The *Ladies' Home Journal* を考察の対象とする。白人の中産階級以上の女性読者を想定して出版された同誌の女性作家作品の言説研究をとおして、雑誌の機能や小説との関係を考察したい。見落とされてきたアメリカ文学作品の生成の場として雑誌の言説を分析することは、既存の小説作品研究では明らかにすることができなかった展望を提示することが可能となると考えた。

二次資料の考察：雑誌内の言説を相対的に評価するために、雑誌出版当時に流通し、女性読者が受容していたアドヴァイスブックなどの資料の分析を行う。アメリカ社会ではすでに Catharine Beecher の *Treatise on Domestic Economy* (1841)などのアドヴァイスブックが多くの女性読者を獲得していた。それらの著書と雑誌が提示する内容を比較検討することは、後者の言説を評価するには欠かせない作業である。アメリカ、ニューヨーク市立図書館などでの資料収集をとおして、19 世紀女性作家による著作、個別作品研究書、包括的な女性文学史および女性史、ジェンダーの視点から解読する広告史や服飾史、料理のレシピなどの分析を引き続き二次資料から行うことにより、一次資料分析を相対的に信頼したものにおけるものとしていくよう心がけている。

連載小説研究の意義：アメリカで出版された既存の女性雑誌についての研究書はジャー

ナリズム、マスコミュニケーション、歴史学の研究者によるものがほとんどである。たとえば、Westport の Greenwood Press 社が刊行する Historical Guides to the World's Periodicals and Newspapers シリーズは、英米における雑誌を主題ごとに分類した著書を刊行している。各著書はアルファベット順に雑誌の通史を紹介し、たとえば、歴史、著名な編集者の紹介、特色、発行部数などの概要を示す。雑誌研究は文学以外の領域の場では行われてはいるものの、収録されている文芸作品を個別に分析し、評価する研究書はいまだにみられない。2003 年の Patricia Okker による *Social Stories: The Magazine Novel in Nineteenth-Century America* は、アメリカ雑誌における複数の連載小説を分析し、その小説形態が独立した世界をもつものではなく、作者、読者、編集者、社会という様々な様相との関係性において生じる共同作業の成果との評価を提示する。しかし、同書は連載小説という作品形態の独自性に着目するものの、特定の雑誌に掲載された作品分析を詳細に行うことはしない。国内外の雑誌連載小節研究はいまだに十分な開学がなされていない場であり、特に特定の女性雑誌の系統立った個別作品分析をする研究書はない。このように、他の女性雑誌と同様に、The *Ladies' Home Journal* の女性文化構築に果たした影響力の大きさは、詳細な分析がなされぬままに既成事実として受容されている。まして、同雑誌に特化した文学作品、特に女性作家による作品を対象とした研究書は国内外でいまだに出版されていない。本研究では、再評価の機運にも乗れなかった女性作家による作品を分析しながら、女性雑誌という媒体自体を考察することにもなる。また、Jane Tompkins らが疑問を投げかけた文学作品の価値基準、すなわちキャノン形成というものを念頭に入れながら、女性雑誌におけるできるだけ多数の作品を評価することを目指した。

４．研究成果

(1) Bok 編集下の連載小説作品研究：

① 読者を巻き込む仕掛け

雑誌、特に大衆女性雑誌の言説についての系統立った既存の研究がなされてこなかったことをふまえ、ニューヨーク市立図書館やフィラデルフィアの現地視察と資料収集で得た資料を利用しながら、雑誌、大衆女性雑誌、The *Ladies's Home Journal* に関する先行研究をまとめ、研究の可能性を整理した。その結果を 2007 年 10 月 13 日の日本アメリカ文学会第 46 回全国大会で発表し、東北アメリカ文学研究第 31 号にまとめた。さらに、同誌に掲載される小説作品を「謎」、「偶然」、「秘密」という観点から研究する視点を導入することで、連載小説作品が著書形態で出版される作品とは異なった評価基準を持つものであることを明らかにした。連載という形態が読者の関心を次号の発表まで維持しつづけることが必須条件とするために、これらの 3 要素が読者を巻き込む仕掛けとして大きな機能を果たしていることを理解することができた。

② 雑誌内の多層な言説との関連性

1941 年 11 月号から 15 年 5 月号まで連載されたジェラルディン・ボンナーの「セントラルの少女」を分析した。その作業の過程で、広告、エッセイ、表紙、小説作品という多層な言説を相対的に利用して、編集部が雑誌の理想とする女性像提示を試みていたことを明らかにした。同誌を構成する様々な言説は、相互に関連しながらそれが主張するメッセージを構築していたことは本連載小説で対象とした「電話」という主題以外にも同様のことが指摘できよう。「電話」という主題に焦点をあてると、それが男性のおもな活動領域とするビジネスの世界を表わすひとつの記号であり、同誌が提唱する理想の女性たちの活動領域である家庭から距離をおいて表象されている。そのために、小説作品内では「電話」という媒体は当時多くの家庭に導入された時期であったにも関わらず、まだ、それが導入されたばかりの時代を描写し、さらにそれを用いて殺人事件を扱うというように、非日常世界の象徴として登場していることに着目した。

(2)『レディーズ・ホーム・ジャーナル』と The Curtis Publishing Company の関係：Bok は雑誌が内包するすべての言説を詳細にチェックしたことで有名である。小説作品といえども、彼の個人的な思想や趣向を反映しないものはなかった。小説を分析するにあたり、彼の思想をエディトリアルなどのコラムやエッセイから読み取った結果、彼の思想の根底にはアメリカへの「愛国精神」があり、雑誌の言説はすべて、ボックの理想とするアメリカ社会に貢献する女性に向けて発せられていることが確認できた。雑誌に通底する愛国精神の原点を確認するために、2008 年 3 月に、The *Ladies' Home Journal* の出版社であった The Curtis Center (Independence Square Philadelphia, Pennsylvania)を視察に行った。当時の出版社は現在はビジネスセンターとして利用されており、住所をたよりに訪問したが、その立地環境に驚き、同誌の使命を認識することができた。Bok の時代に引っ越した先は、アメリカ独立の象徴としていまだにアメリカ国民に大きな意義をもつ Independence Hall の隣であり、Independence National Historical Park を出版社の建物が

公園周囲４面のうちの１面となってそれを囲んでいた。まるで、Independence Hall の一部であるかのようにも思える立地である。12 階建で内部に噴水や、ティファニーによるモザイク作品を展示する建物は、同社の当時の隆盛を示すものである。その建物に勤める出版社の人間が、毎日、「アメリカ」という国家を意識し、建国の認識を新たにしながら仕事をせざるを得ない状況に置かれていたことが容易に想像できた。同誌の言説が、アメリカ独立宣言と同じ場所からアメリカ女性たちに発せられることを大きな目的としたであろうことが理解できた。また、同視察では、Philadelphia の文化的な意義を確認するとともに、Bok が婿養子に入り、The *Ladies' Home Journal* を創刊した Curtis 家ゆかりの音楽学校が町の中心部に残っていたりするなど、同家の当時の影響力を確認できた。さらに、編集者 Sarah J. Hale が *Godey's Magazine* を印刷していた家を訪問し、当時の印刷機などを見学した。創刊当初の大衆女性雑誌が、資本主義や大量消費社会が生み出した媒体というよりも、アメリカ建国の歴史の中心となった立地から発せられた意義を強く認識することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① 秋田淳子、*The American Woman's Home* (1869)についての一考察：環境への提言、東北アメリカ文学研究、査読有、第 32 号、2009、pp. 99-33
② 秋田淳子、『レディーズ・ホーム・ジャーナル』における電話：不在の意味、『メディアと文学が表象するアメリカ』、査読無、英宝社（山下昇編）、2009、pp. 121-41
③ 秋田淳子、『若草物語』における Louisa May Alcott の自然についての一考察、英文学研究・支部統合号（東北英文学会 Proceedings of the 63rd Conference）、査読無、2009、pp. 13-19
④ 秋田淳子、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての *The Ladies' Home Journal* における小説作品研究の可能性、東北アメリカ文学研究、査読有、第 31 号、2008、pp. 19-43
⑤ 秋田淳子、Ann Beattie の *Distortions* (1976)における「食」のモチーフについての一考察、言語と文化・文学の諸相（岩手大学人文社会科学部欧米研究講座編）、査読無、2008、pp. 31-57
⑥ 秋田淳子、Louise Erdrich 著 *Love Medicine* (1984)における「キッチン」についての一考察、東北アメリカ文学研究、査読有、第 30 号、2007、pp. 60-77
⑦ 秋田淳子、Louise Erdrich 著 *Love Medicine* (1984)における一考察：天空と大地の調べ、Proceedings of the 61st Conference（東北アメリカ文学会編）、査読無、2007 年、pp. 53-60

〔学会発表〕（計４件）

① 秋田淳子、Charlotte Perkins Gilman の「自然」についての一考察、日本アメリカ文学会東北支部 9 月例会、2009 年 9 月 26 日、仙台白百合女子大学
② 秋田淳子、*The American Woman's Home* (1869)についての一考察：環境への提言、日本アメリカ文学会東北支部 12 月例会、2008 年 12 月 20 日、岩手大学
③ 秋田淳子、『若草物語』4 作品における Louisa May Alcott の自然描写についての一考察、東北英文学会第 63 回大会、2008 年 11 月 23 日、東北学院大学
④ 秋田淳子、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての *The Ladies' Home Journal* における小説作品研究の可能性、日本アメリカ文学会第 46 回全国大会、2007 年 10 月 13 日、広島経済大学

６．研究組織
(1)研究代表者
秋田　淳子（AKITA JUNKO）
岩手大学・人文社会科学部・講師
研究者番号：　１０２５１６８８

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし